

2026 年アジア・アジアパラ競技大会組織委員会 村手 聡・事務総長に聞く

第 20 回愛知・名古屋アジア競技大会及び第 5 回アジアパラ競技大会は来秋、開催される。アジアのアスリート、パラアスリートが集結する総合スポーツ競技大会はオリンピックに次ぐ大規模大会。アジア大会 2026 年 9 月 23 日ー10 月 8 日開催。日本では 32 年ぶり、3 回目。45 の国・地域から最大 15,000 人の選手団が 41 競技で覇を競う。日本初のアジアパラ競技大会は 10 月 18 日ー24 日、3,000 人～ 4,000 人が参加、18 競技でメダルを目指す。大会運営の責任者で、アジア・アジアパラ競技大会組織委員会の村手聡・事務総長に大詰めを迎えた準備状況などを聞いた。



ー大会開幕まで 1 年を切りました。準備状況をお聞かせください。

村手聡事務総長 アジア大会はそれぞれの種別・種目別のプログラム関係のスケジュールが固まってきました。それを前提にして、どこで、いつ何が行われるのかが決まってくるので、各々の会場でどのような設えをするのか、どう運用をしていくのか、などを検討します。その上で競技に合った契約をして具体的な実行段階に入っていきます。開幕まで残すところ 300 日余り、まさにラストスパートをかけないといけない時期ですね。

ー競技会場の整備、改修工事は順調ですか。

村手事務総長 まず大きな会場については、名古屋市北区の I G アリーナがオープンして、柿落としの大相撲も好評で、しっかりした「箱」が出来上がりました。そこでは柔道とバスケット、それに車椅子バスケットが開催されますが、大変楽しみにしている方も非常に多いと思います。また、新しく改築した会場も出来上がってきています。メイン会場の瑞穂陸上競技場も来年 3 月には完成して、引き渡しを受けますが、もうほとんど出来ているのが現地で見て分かります。東山のテニス会場も 3 月に完成予定で、いずれもそれから会場運営の準備をしっかりとやっていくことになります。

ー現段階で、会場全体の整備状況は何合目でしょうか。

村手事務総長 もうほとんど目途がついてきた段階と言えるでしょうね。通常の競技場としての機能面を高めるための改修を今やっていただいてそれは大体今年度中には終わるだろうと考えていて、その後大会用のグレードアップ部分について仮設工事などを行うことになります。

ー引き渡し後の運営準備とは。

村手事務総長 例えばバリアフリーがどうかとか、トイレや観客席の数が

十分か、などを検討し、仮設を含めて必要な様々な改修、調整を進めていくことになります。放送をする場合、普段は必要がありませんが、試合会場の照明をより明るくする作業もしなくてはなりません。大会のスケジュールに合わせつつも、市民の方の利用も並行しながらの詰めの作業になります。会場の工期はそれぞれ違いますが、調整をしながら間に合うように最終的な準備をしていくことになります。いずれにしてもハード面は心配ないと思っています。

ー会場ごとに微調整が必要になるのですね。

村手事務総長 そうです。競技場はアジア大会が 53 会場、パラ大会は 19 会場になりますが、会場の改修が終わってから、それぞれの回線の整備やエリアごとにどう管理していくかの調整も進めていくことになります。

ーところで、アジア大会、パラ大会の位置づけは。有力な選手が出場しますか。

村手事務総長 大会はオリンピックやパラリンピックに次ぐ大規模な国際総合スポーツ大会です。国内の出場選手については JOC（日本オリンピック委員会）や JPC（日本パラリンピック委員会）が中心になりますが、JOC は 2028 年夏のロサンゼルスオリンピック・パラリンピックに向けた重要なマイルストーンと位置づけた宣言をしていて、多数のメダル獲得期待できる強力な日本選手団を編成し、総力を挙げて選手強化を行う、としています。日本以外の国・地域も同様の意気込みで選手団を送り込んで来るとみられ、一流のアスリートによる戦いが間近で見られると思います。また、特にパラ大会は共生社会の実現にも貢献するものです。多くの子供たちに競技を見ていただ